

DOCD-0002



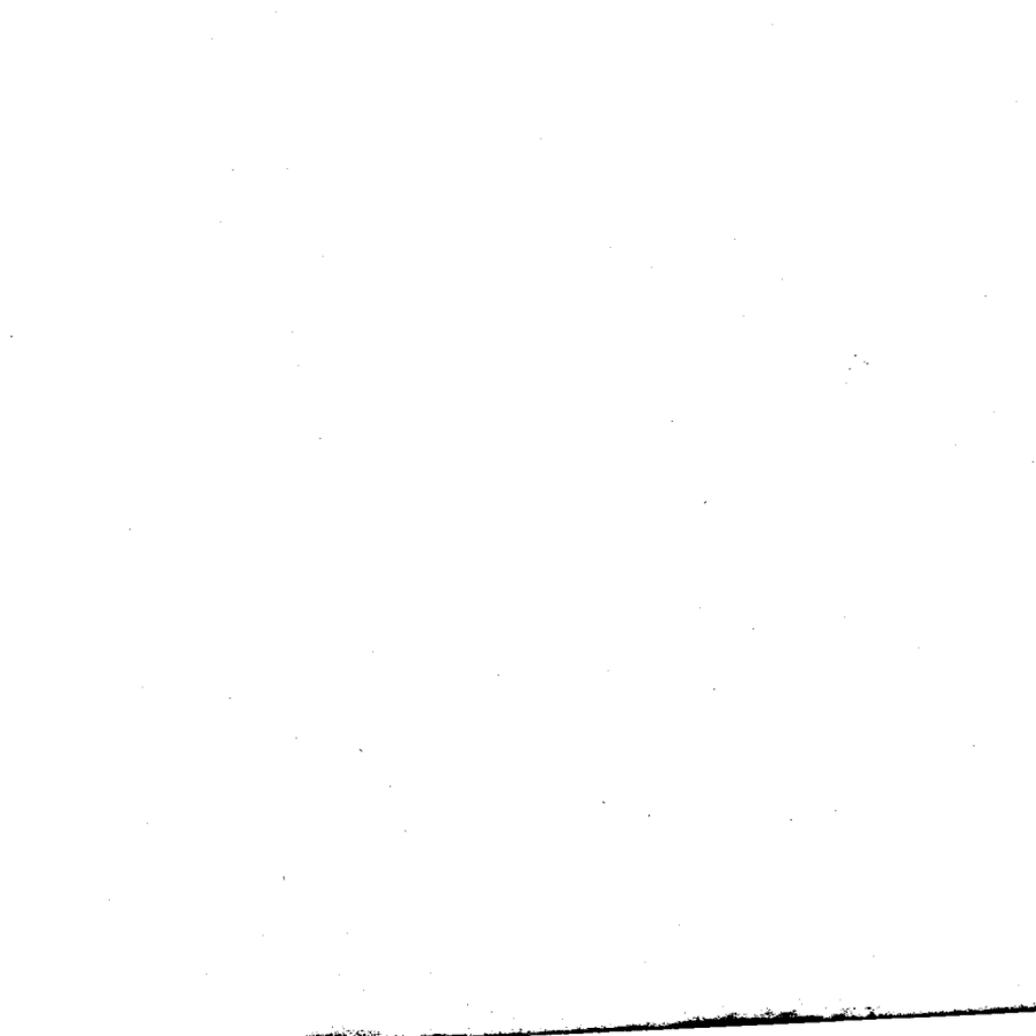
# LA PRIÈRE D'UNE VIERGE

*Les Oeuvres Populaires Pour Piano*  
*Par MEIKO MIYAZAWA*

Damh. katedrski. Audio. Member's. Club

**DAM**

COMPACT  
**disc**  
DIGITAL AUDIO





## 乙女の祈り

ピアノ：宮沢明子

T.No.

1	エリーゼのために(ベートーヴェン) FÜR ELISE.....	2'36"
2	夜想曲 作品9の2「愛情物語」(ショパン) NOCTURNE OP.9-2.....	4'44"
3	入江のざわめき(アルベニス) RUMORES DE LA CALETA .....	3'42"
4	マラゲーニャ(アルベニス) MALAGUEÑA.....	3'04"
5	楽興の時 第3番(シューベルト) MOMENT MUSICAL OP.94-3.....	1'54"
6	乙女の祈り(バダジェフスカ) LA PRIÈRE D'UNE VIERGE .....	6'02"
7	トルコ行進曲(モーツァルト) RONDO ALLA TURCA .....	3'34"
8	ワルツ 嬰ハ短調(ショパン) WALTZ OP.64-2.....	3'09"
9	トロイメライ(シューマン) TRÄUMEREI .....	2'53"
10	愛の夢(リスト) LIEBESTRAUM.....	4'33"
11	小犬のワルツ(ショパン) WALTZ OP.64-1(Valse du petit Chien).....	1'31"
12	月の光(ドビュッシー) CLAIR DE LUNE .....	4'44"

## 制作にあたって

日頃は第一家電をご愛顧いただきまして、誠にありがとうございます。

'83秋に、DAMオリジナル・デジタル録音を集めた第1号CDを発表いたしました。今回お届けする第2号は、この夏「マニアを追い越せ大作戦」でご好評をいただきました、「宮沢明子・乙女の折り」ピアノ名曲集(DOR-0127~28)のCD化です。

誰でも知っているピアノの小品を、一流の演奏家をお願いするということは、大変難しく、今迄仲々実現できなかったのですが、「マニアを追い越せ大作戦」の10周年を記念して、世界の音楽界で活躍中の宮沢明子さんをお願いした次第です。

宮沢明子さんといえば、かつて「ピアノとの対話」や、オーディオ・ラボ・レーベルの一連のシリーズで、音楽ファンはもとより、オーディオ・マニアの方々にも良く知られている日本を代表するピアニストです。

今回、東芝EMI株と専属契約を結ばれ、市販レコード(「宮沢明子/ショパン・リサイタル」TA-72118)のレコーディングをする機会に、DAMの

方のレコーディングもお願いしたいということで、宮沢さんと東芝EMI株の御好意により、スケジュールをさいていただいて実現したものです。

良いホールで録音したいというDAMの希望により、演奏者、ミキサーともに満足できるホールとして、こけらおとして、宮沢さんが初演奏をした茅ヶ崎市民文化会館が選ばれました。3月14日の録音当日は、折から雪となってしまいましたが、録音本番では、ノイズを避けるため、暖房も止めざるを得ませんでした。そんな厳しい条件の中で、情熱的な演奏がくり広げられ、宮沢さんのこれら小品を数多く弾き込んでこられた実力と、プロに徹したレコーディングぶりにスタッフ一同、頭の下がる思いでした。

とかくピアノ小品集というと、曲目が全てで、演奏・録音は二の次という例を見受けますが、本アルバムは知らない曲は無いというくらいに親しみ易い名曲ばかりを網羅しているばかりでなく、コンサート・ピアニストとして豊富なキャリアと実力、そして子供達のピアノ教育にも大変熱心な宮沢明子さんのピアノに対する愛情があふれた、

感動的な名演といえるでしょう。更に加えて、過去DAM 45のクラシック・オリジナル録音を全て手がけていただいている、ミキサー・池田氏の技術と見識により、その名演があますところなく収録されています。

ところでDAMオリジナル録音は、'79・9月、デジタル録音に着手して以来、原則として、アナログとデジタルの両方式でレコーディングしておりますが、今回のCDは、デジタル録音のマスターを使用いたしました。

アナログ録音とデジタル録音について、DAMの経験によると、どちらが優れていると一概にはいえませんが、CDについては、何といてもコンパクトで取扱いが簡単なのが魅力です。特に今回の名曲集は、45回転LP 2枚組がCD一枚に楽楽と入ってしまうという、長時間連続演奏もその大きな長所といえます。又、レコードと違って、CDは内周歪の心配がありませんから、本CDでも、音楽的な見方から曲順を決めてあります。

最近、市販のレコーディングは殆んどがデジタル録音方式になってしまい、それをレコードとCDに

している様ですが、「宮沢明子・乙女の祈り」は、レコードがアナログ録音、本CDがデジタル録音となっていますので、オーディオ・マニアの方は、両方を聴き比べることによって、それぞれの録音方式の音の違いがおわかりいただけることかと思えます。

それでは、このピアノ名曲集を心ゆくまでお楽しみください。そして皆様のライブラリーの中に加えていただければ幸いです。

なお、CD制作にあたり、宮沢明子さんをはじめ、関係の方々、そして東芝EMI㈱に多大な御協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

今後、DAMといたしましても、アナログ、デジタルを問わず、より良い音楽ソフトを開発し、会員の皆様に少しでもお役にたてるよう、更に一層の努力をする所存ですので、今後とも皆様の御支援のほど、よろしく願い申し上げます。

DAM推進委員会

時間さえとまってしまったかのような、夏の昼さがり。うだる暑さの中、お屋敷町を歩きます。深い庭木の繁みから、蟬の声。強い陽射しと樹陰、光と影の交錯に、少年はふと、永遠を予感さえして、めまいさえ覚えてしまったり。角をひとつ曲がると、どこからかすかに、ピアノのつま弾きが聴こえてきたりするわけですね。この場合、暑苦しいベートーヴェン：ピアノ・ソナタなどであっては、断じて、ならない。やはり、「乙女の祈り」「トロイメライ」といったような、かそけき小品であって欲しいもんです。歩みを進めれば次第に音は近くなり、やがてとある一軒。からたち、金木犀の緑濃い植込みの奥、時経た洋館の中から、どうやら聴こえてくるらしいのね。となればピアノを弾くのは、少女、それもすき透るように白い肌の美少女、に決まっています。華奢で腺病質で病弱で、森の奥の人知れぬ沼のような深い瞳の、夢見る少女。その口吻細工にも似た指で、ショパンしちゃうわけですね。白い道に立ちつくしたまま少年は、麦藁帽子の下にキラキラ光る額の汗を拭きもやらで、見もやらぬ少女に想いを寄せ、大人の入りに立ったときめきと、そしてとまどいにも似た不安で、やるせなくなってしまうのでした。コレね、体験ではありません。が、ほら、このCDに入っている小品の数々って、そんなイメージがありますよね。いってみれば、夏の日々への想いが結晶したような小品たち。聴きかえしながら、ずいぶんと遠くまで来てしまったものだな、と、

つくづく思ってしまうのです。実際、昔語りをすれば、ほくたちが小学生だった頃、クラスに1人か2人、ピアノを弾く子がいましたよね。勉強も良く出来て、先生のお気に入り、いいとこのお嬢さんらしくござっぱりとしゃれたワンピースなんか着てさ。そして、なにより、きれいでした。フツーに好意を寄せてる子に対しては、髪を毛ひっぱり消しゴムちぎっては投げたりしてコンタクトとるんだけれど（異性に魅かれる自分の部分一つのが気恥かしくて、その気持ちを正攻法で内部処理する行動パターンが未だつかめてないものだから、好意が逆の形で発露するわけね）、ところが、ピアノのお嬢様、彼女となると、もう、気品と優雅さで超越してしまってたね。子供心にも、こりゃ世界が違う、と漠然のうちに感ずるのです。放課後ゴムとびやら珠算塾の世界じゃないよ。ピアノ・レッスンと家庭教師の世界なのだ。寝っころがって、せんべい齧りながら「快傑ハリマオ」見てると、もう、根本的に違うんですね。髪を毛ひっぱりでもしようものなら、指が腐ってしまうような、遙かに遠い美少女でありました。今はもう、そんな少女たち、いなくなりました。みたいなのであります。国民総生産G N Pがグワツと上がり、国民は全員、中流になった。子供の教育も、ちっとは考える余裕がでてくる。女の子だから楽器でもやらせようかしら、なんてね。ママにそう持ちかけられれば、パパはもう、「ピアノの美少女」への憧れをトラウマのように持つ

てますから、「ウム、いいじゃないか」って具合ですわね。でもピアノ、にはならないのね、これが。ピアノを買うんだったらエレクトーン、お、これは登録商標<sup>®</sup>だから、言い換えて電子オルガン、そのほうがいいに決まってる。ほぼ同じ位の値段で、音色がいっぱい出るし、リズムも出る。チャーシューメンと五目ソバ的に違う。この五目的多彩さが、ミドル・クラスにとってはたまらないんですわ。加えて、ヘッドフォーンを使えば2DKでも夜までひける、教室も組織化されて授業料は安い——とくれば、これはもう、勝負は明らかですわね。小学生の女の子は、今や、ことごとくエレクト、あ失礼、そのテの電気楽器をやってるわけで、「ある愛の詩」なんぞ弾いちゃう時代となってしまいました。

ぼくたちは、「永遠の美少女」に憧れて、大きくなってきた、ここまできたト。この時代、少女たちが指一本でイージーに「マイ・ウェイ」を弾いてしまう情況（象徴的に言ってるんです）を考えれば、今、憧れが見出せない時代になってしまったような気がします。「乙女の祈り」「エリーゼのために」といったピアノ入門者用のかそけき小品も、あと20年もしないうちに消えてしまうのではないのか。このCDを聴きながら、ふとそんなことを想い、遠い夏の日々への追憶にも似て、やるせなくなってしまうのでした。

このCDでピアノを弾くのは、宮沢<sup>みやざわ</sup>明子さん。日

本とベルギーをフィールドにして活躍する一級のピアニスト。コンサート活動はもとより、後進への教育に力を注いでいる人です。だから、ここへ収められた曲目、ピアノに親しもうとする人が必ず通過するこうした曲目は、もう何千回と自分で弾いて、また生徒さんが弾くのを聴いてることでしょうね。フツーさ、なににせよ、やりすぎると飽きてくる。ところがこの演奏を聴けば、どの曲も初めて作られ、初めて演奏されたような瑞々しさにあふれています。僅かな間のとりかた、心が揺れるようなテンポのたゆたい。小さい曲のすみずみまで、気持ちや寄り添わせ、心配りに満ちて、美しく感動に満ちています。こうした演奏家だからこそ、ピアノ教育にも力を注げるのだと思えるのですわね。

曲はいずれも、ピアノを習ったことのない人もなじみ深い小品の数々ばかり。主義主張を盛り込み精魂こめて心血そそいだ凄い作品、などでは全然ありません。大作・力作の合い間、息抜きに作ったような、くつろぎに満ちた音楽です。材料が良ければ、あまりいじくらずに素材を生かした料理の方がおいしいでしょ。あれです。力作では感じられない大作作曲家の素顔、新鮮な魅力が愉しい、そんな小品を集めました。

エリーゼのために

あのルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770

—1827) が40歳の時に作ったなんてちょっと信じられないくらい、かわいい愛らしい作品です。当時、彼はテレゼ・マルファッティという女性に愛を寄せており、曲の名はその名前を出版社が読み間違えたのでは、という説があります。主題が2つのエピソードをはさむ(A・B・A・C・A)形式の曲。

### 夜想曲 第2番 変ホ長調 作品9-2

フレデリック・ショパン (1810—1849) の作った21曲の夜想曲中、最も有名な1曲。ショパンはフランス人、ポーランド人の両親のもとに生まれ、4歳からピアノを習って、小さい頃から神童と呼ばれました。作品もピアノのためのものが多く、いずれも華やかなリズムにあふれています。ゆったりとたゆたうように、またすべるように曲は続き、右手のトリルと、短かいこだまを響かせて終わります。

### 入江のざわめき

カタロニア (スペイン) の作曲家イサーク・アルベニス (1860—1909) は、スペインの風土と精神を生かした小品をたくさん作りましたが、この曲もそうした中の1曲で、ピアノ曲集「旅の想い出」に含まれています。

地中海の港町マラガの民謡を想わせる旋律。

### マラゲーニャ

同じくアルベニスの作品、ピアノ曲集「スペイン、アルバム」の6葉」の1曲。

もともと「マラゲーニャ」は南スペイン地方の踊り歌のことで、アルベニスはそれを独自に様式化しました。

活発でエキゾチックなリズムの舞曲にはじまり、遙かに想いをはせるような美しい中間部をはさんで、再び舞曲となります。

### 楽興の時 第3番 作品94-3

フランツ・シューベルト (1797—1828) は「未成交響曲」で有名なドイツの作曲家ですが、本領は「冬の旅」をはじめとする歌曲のかずかずと、多くのピアノのための作品です。

6曲からなる「楽興 (音楽、としてもいいでしょう) の時」の中で最も親しまれる第3番は、長調と短調の交替が、ふと陽がかけり、また射してくるような感じを与えて、印象に残ります。

### 乙女の祈り

作曲家テクラ・バダジェフスカ (1838—1861) はポーランドの女性。作曲家としてよりもピアニストとして活躍した人のようで、作品は彼女が18歳の時に作ったこの1曲のみがあまりにも有名です。強い音で下降する前奏から、典雅に花開くような主題が始まり、変奏が続きます。

## トルコ行進曲

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756—1791)は40年たらずの人生を通じて、独奏曲からオペラまでの広い分野に多くの曲を作りました。ピアノ・ソナタ第11番イ長調の第3楽章がこの「トルコ行進曲」で、当時はやっていたトルコ音楽に着想を得て作られました。

## ワルツ 第7番 嬰八短調 作品64—2

ワルツは円舞曲と訳される、19世紀ヨーロッパではやった舞曲の形式。ショパンのこの作品はワルツというものの、ポーランドの舞曲マズルカに近いアクセントを持っています。

1846—47年にかけて作られたもので、ためらいがちに曲は始まり、次第に華やかさを増す3部形式で作られています。

## トロイメライ

ローベルト・シューマンはショパンと同じ1810年、ドイツに生まれた作曲家ですが、精神に異常をきたし、不幸な後半生をおくりました(1856年歿)。彼が28歳の時に作ったピアノ曲集「子供の情景」は、子供の気持ちになって作ったロマンティックな小品集。第7曲「トロイメライ」は、まどろむように美しい音楽です。

## 愛の夢 第3番

「交響詩」という形式を創り、また「ハンガリー

狂詩曲」でよく知られるフランツ・リスト(1811—1886)は、数多くのピアノ曲を残しています(ハンガリー狂詩曲も原曲はピアノ曲)。

1850年、リストは3つの自作歌曲をピアノ独奏用に編曲、「愛の夢」と名づけました。その第3番は、F.フライリヒャートの詩による「愛しなさい、愛の続く限り」という原曲によるものです。

## ワルツ 第6番 変二長調 作品64—1「小犬」

「小犬のワルツ」と呼ばれて親しまれるこの曲は、さきの第7番とほぼ同時期に作られたもの。犬が自分のしっぽを追ってくるくる廻るさまを見てこの曲を作ったというエピソードが伝わっています。こまかく廻るような音形が高く低く続きます。中間部にゆっくりした部分をはさむ3部形式の短い曲。

## 月の光

クロード・ドビュッシー(1862—1918)はフランス近代の作曲家。「印象主義」を音楽で表現して、後に続く作曲家に大きな影響を与えました。その「印象主義」の第1歩ともいえるこの曲は、「ベルガマスク組曲」の1曲として、1890年に作られたもの。

ヴェルレーヌの詩「月の光」に着想を得たともいわれ、夢見のような響きは、湖水に写る月の光を想わせます。



- 伊藤 今日はどうもお疲れさまでした。
- 宮沢 どうもありがとうございました。
- 伊藤 とってもいい録音でほんとうにうれしくなっちゃう。
- 宮沢 ととても楽しかったです。(ウフフフ……)
- 伊藤 ところで、貴女にお聞きしたい事があるの。答えて下さいね。
- 宮沢 ハイ。
- 伊藤 ピアノを始めたのはいつから？
- 宮沢 世間では2歳8ヶ月という事になってますから、そうしましょう。でももっと前です。
- 伊藤 お腹の中にいたときからのね。
- 宮沢 そう、母がピアニストでしたから。
- 伊藤 ピアノの魅力、つまり楽器としてのピアノの魅力は何？
- 宮沢 私、もう一度この世に生まれ直しても「ピアニストになる」って言うでしょうね。だ

ってピアノって鍵盤の88鍵が全部生きてますからね。それにひじょうにデリケートな楽器で、自分が心こめれば答えてくれるし……。ほんとにいつも一音一音大切にしたいという気持ちをわかせる楽器ですもの。

伊藤 ではピアノ音楽の魅力、つまり好きな曲、得意な曲、又は好きな作曲家などについては？

宮沢 私はね、とにかく「B」が好きなんです。バッハ、ベートーヴェン、ブラームス。でも私自身、自分の個性がすごく生きて、それで人でできないって言うとおかしいですが、私の今一番得意なのは装飾音なのね、それで、スカルラッチェとかバッハとかモーツァルトとか結局そんなところになるかな。でも私はショパンも好きだし、フランス近代、スペイン音楽、シューマンも大好き、だから「私の得意なものは？」って言う事はあまり好きじゃないのネ。

伊藤 ウーン、とにかくピアノ音楽全てが好きって言うことネ。

宮沢 そうね。

伊藤 次に、最近、目標としている事を話して下さい。

宮沢 まずはピアノに向かって姿勢を正す。指の姿勢、心の姿勢。

伊藤 今後やっていきたいと思っている事は。

宮沢 やっぱり、いいレコーディングを続けたいという事。それにはホールと楽器を選びた

いです。自分がせっかく一所懸命弾いているのに限界を感じる様な楽器では演奏家として非常にさびしいですからね。それに私が「必ずこの人と組みたい」という音のパートナー、つまり世間で言う調律師、そしてレコーディング・エンジニア。このトリオは主張して行きたいです。

伊藤 今迄の印象に残る活動を話して下さい。個人的でなく仕事の上での……。

宮沢 全集を録音したって言う事は大きいですね。あれは1965年、ずいぶん前になりますが、ハイドンのピアノ・ソナタ62曲全部録音した。これは世界で初めてです。それからモーツァルトのソナタも全部。この2つは大きい。それからスカルラッチィだけのリサイタルを録音した事も大きいワ。

伊藤 そうね。ところで今迄いろんな録音なされたけれども、録音されたレコードどれくらいありますか。

宮沢 72枚をさよならして73枚目で東芝の専属になりましたから……。スカルラッチィのアルバムが73枚目、カブレフスキーの子供のアルバムで74枚目、こんど発売されるショパンで75枚目、進行中のバッハで76枚目、これにコンパクト（ディスク）があるし、名曲シリーズ（発売予定で録音進行中）があるし……。

伊藤 だんだん、手足がたりなくなって来たわネ。ところで、その録音されたレコードの中で

特に気に入ったものってあるの？

宮沢 1にも2にもスカルラッチィのアルバム。これは誰が何って言っても、生まれてはじめて「どうだった？」っていう人の意見を聞かなくてもすむ。いいかえれば、自分がこの瞬間っていうものを素直に発揮できたと思うの。それに音のバランスもよかったし、録音状況もよかった。そういう点でスカルラッチィ、それから私はこんどのショパンのアルバム気に入っているの。

伊藤 今迄、音楽の話題でしたが、話題を変えてっど!!もっとも得意な事……って事は貴女の趣味ってな～に？

宮沢 (即座に) 食べること!!

伊藤 出てくると思ったで、好きな食べ物ってな～に？

宮沢 ようするに、おいしいものは全部好き。もう手抜き食事ぐらいいやなものはない。それから、高くてまづかった時はお金を返してもらいたいワ。

伊藤 ホント、ホント。(笑い)

宮沢 演奏も同じですけどネ。(笑い)

伊藤 今日の演奏会代返せ!!って。(笑い)

宮沢 テイク何とか分お返ししなきゃ、なんて言ったりしてね。(笑い)

伊藤 単純な質問だけど、好きな色は？

宮沢 真っ赤と真っ黒、それにゴールド。

伊藤 いかにもそれは性格そのままをよくあらわしているわね。(笑い) 花は何の花が好き？

- 宮沢 真っ赤なバラが好き。
- 伊藤 だからスペイン音楽素敵ですネ。今度ぜひ、スペイン音楽に取組んでみたい。
- 宮沢 そうですね。
- 伊藤 最後に。ベルギーと日本とをずいぶん往復して活動していらっしゃるけど、だいたいどれ位の比率なの？
- 宮沢 それは日本で活動をできるだけ多くしていますが、1984年からはヨーロッパへ行くのがものすごく多くなりそう。
- 伊藤 でもいいわ、国際的にジャンジャンと（活動する事は）。
- 宮沢 耳をからにすることも大切ですし。それから、「私という人間がどんな国に生まれて、どんな歴史を持っているんだろう」という興味で外国人は来るわけでしょ。そういう人の前で演奏するのも大事な事かと思ったりして、別に日本人だからという事は関係ないけれど。
- 伊藤 そうね、つまり、そういう人間的な色っていうものを全くなくして、ほんとにインターナショナルなピアニストになるっていう事ね。
- 宮沢 なりたいたいと思っています。
- 伊藤 そうなる事がもう目の前に見えていますね。こちらは大いに期待していますよ。
- 宮沢 ハイ。
- 伊藤 今日はどうもありがとうございました。お疲れさまでした。
- 宮沢 ありがとうございます。

## 明子さんのこと

明子さんのお付き合いは、よくよく考えてみますと、二年にも満たない月日です。けれども、もう、ずっとずっと大むかしから仲良しであったような気がします。

それは、彼女の人間そのものが親近感溢れる暖かさに満ち満ちていること。そして、笑うときも、涙するときも、怒るときも本音であること。よそゆきのおすましが苦手で、いつも普段着ありのまゝであること。食べることが大好きで、そのことをとても大切にすること。大きな声で、とてもないしょ話など出来ない人であること。自分を大事にすると同じように、それぞれの人間を大事に、つまり「人の和」を大事にすること。自己主張をはっきり持っていること。エネルギーに行動すること。とにかくにも、なんととっても、「ピアノ」が大好きなこと。そして音一つ一つをこよなく愛し、心血をそそいでピアノに向かっている。そんな明子さんが、わたしは好きなのです。

これらのことどもをあやなして、彼女の音楽が生まれてくるのです。そして、彼女の音楽は「生きています。心の奥深く語りかけてくるのです。そんな明子さんとのピアノを通しての語り合いが、わたしは好きなのです。

伊藤玲子（ディレクター）



## 宮沢明子略歴

教会でオルガンをひく祖母からピアニストだった母に才能が受けつがれ、すでに2歳8ヶ月から母のひざでピアノをひき始める。音楽好きの一家に育ち、神奈川県逗子で幼少時代をすごす。ユニークな個性と才能がのびされ、小学校5年より桐朋学園「子供の為の音楽教室」に入室。中学1年より東京に移住する。中学3年の時全日本学生音楽コンクール（毎日新聞社、NHK主催）で全国第1位及び文部大臣賞受賞。桐朋学園音楽科に入學し研鑽を積む。

1961年渡米、エール大学音楽部、ジュリアード音楽院で学ぶ。1961年渡欧。同年10月ジュネーブ国際コンクールに1位なしの2位入賞。1964年1月ニューヨークにて故ケネディ大統領追悼演奏会のソリストに選ばれる。同年9月イタリアヴィオッティ国際コンクールピアノ部門金賞第1席受賞。そしてヨーロッパのキャリアがスタートされる。

1965年3月日比谷公会堂で帰国後初のリサイタルを行う。以後ヨーロッパはもとより、日本全国（稚内から宮古島まで）くまなく演奏活動を行い今日に至っている。そしてレコーディング活動とレコードの枚数は世界でも屈指の存在といえよう。

1978年10月から79年3月までNHK教育テレビ「ピアノのおけいこ」ですばらしい指導ぶりが圧倒的人気を博した。

1980年9月、初のエッセイ集「ピアニストの休日」を出版（大和書房）、すでに版を重ねること11版、好評発売中である。

1982年6月4日には第4回国際被害者学会シンポジウム日本大会協賛チャリティコンサートを開き成功裡に終る。

心からピアノを愛し、努力と厳しい修業を続ける彼女に対し温かく声援を送るファンは全国に拡がっている。

1983年2月東芝EMIと専属契約を結び第1枚目として「スカラルラッティ・リサイタル」が5月に発売され、2枚目として「カバレフスキー こどものためのアルバム」が9月に発売された。

## 執念さえあればよい音が得られるか……

DAMオリジナル・レコードを手にする度に音楽とオーディオにいろいろと思いを巡らすことになる。いったいどうしてだろう。私の若い頃はレコードという必らずといってよいほど、遠い、外国で高名な演奏家によってである。この距離差が大きいほど有難いというレコードの価値観につながっていたように思う。ところが、今日は外国自体が近くなったし、国内でどんどん録音が行なわれる。音楽もレコードも身近な事がらで、自分の考えや体験を通じて実感できるような時代なのである。この1セットのレコードも私の音楽と音体験に強烈なインパクトを与えたものだ。

まず、宮沢明子さんである。

ディスコグラフィの多い点では第一級である。もう何年も前のことだが、このピアニストの録音をのぞいたことがある。調整室で演奏の進行を「うまくいってほしいな」と願うような気分で聴いていた。演奏会とは違って多分に機械組立式のつらい作業が終って皆がほっとした。宮沢さんの録音スタッフへのねぎらいの言葉と一緒に部外者の私にも「私の演奏を応援してくれてアリガトウ」と声をかけてくれた。仕事の邪魔になつてはと隅の方にいたのだが、どうもこの人は聴衆に向けたアンテナの感度が高い人だとその時思ったのである。とかく冷たくなりがちな録音という作業だけに、聴衆の気分で音楽を聞きとっていた私の心持ちを感じとっていたのだと思っている。

私ばかりでなく、多くの人達が口にしたたり、評価したりすることだが、日本のピアニストで「あの人だ！」と特定出来る演奏スタイルを持っている人は宮沢明子だけだといわれている。こう書くと、

その中味は良い方と悪い方の両方になってしまう。が、私はピアノ演奏を自ら志しているわけではないから教科書的な模範演奏など少しも期待していない。さりとてお説教的で強圧的、丁寧すぎるのも困るのである。その点、宮沢明子の音楽は私にとってはたいへん理解のし易い音楽の言葉遣に聞えてくる。変な喩えになるが、私は日本語の東北の訛りが耳に心地よく感じることがある。意味が取れなくてもそう感じる。宮沢明子の音楽の響きのなかには、そうした近くで、それで遠いところの、ことばの魅力というのが好きなのだ。

さて、このDAMオリジナル・レコードの宮沢明子の音楽であるが、私が心づもりしていた音楽と違う。いつもよりはっきりと、言葉遣、一言一句がまぎらわしい発言でなくきれいに響いて来るように聞える。それを音楽美学的にいえばもっと他のいい方もあるのだろうが、私には言葉の意味が聞きとれうえて心地よい余韻が残るといえるのだ。

生演奏に接したならばそんな話も解らないではないが、ただかレコードを聴いただけでよくそんなことがいえるなノちょっと大げさではなからうか。こんな風に考える人もあるかもしれない。私もかつてはレコードというものは技術的境界があつてとても現実の音楽に接するような具合にはゆかぬと考えていたのである。たしかに交響楽のような大きなスケールの展開では困難があることはたしかだ。が、室内楽の状況、とくにステージと客席の心持ちが接するような場所の音楽は物理的にも正確に収録される可能性が高いと思うのである。

ところで、こうした音楽の収録する技術水準が高まったからといって、高級な録音装置を駆使すれば、物理的に正確に記録が出来るかという現実はその逆である。今日でも、20年前のステレオ録音は音楽の内容の高さの評価と一緒に技術的な処理法によさとしても多くのレコードが残っている。高度技術手法ばかりが解決でないことを表わしているからだ。

音楽には演奏家と聴衆が必要であるといういい方からすると、レコード音楽には演奏家と製作スタッフのアンサンブルが最も重要である。私は今でもSPレコードを聞くが、ピアノ音楽ではアルフレッド・コルトーがレコード製作に最も優れたスタッフを持っていたと信じている。録音処理はいつも安定している。その使われているピアノの調律、整音もふくめていつも安心して聴いていられる響きである。コルトーがレコード製作者からいつも尊敬され、大切にされていたことの結果であらう。

こんな見方からすると現代のレコードは完全な商品であって、演奏家は二の次になってしまったと思わざるを得ない現象にしょっちゅう出くわす。

ところでこのDAMレコードは表面的なとらえ方をすれば、商業主義のなかで最も安易に扱って仕方のない分野になる。ところが実はこれがまったく逆で、DAMレコードの企画者と東芝EMIが慎重に考え、製作したレコードであることを知ったのである。厚盤レコードであること、45回転盤であり、マスターテープを76cm/secのものを極力選んでいるという点からも厳しい求め方をされているということがわかる。とりわけこのセット

のようにDAMオリジナル・レコードとなると製作スタッフの顔付きの引き締り具合がまるで違って来るのである。東芝EMIとしては、限定された予算のなかでよい仕事を仕上げねばならぬという一面の厳しさのためかも知れぬ。DAM側はそれ以上に、オリジナル製作であるからには本家の本来的な仕上り以上のものを求める真剣さを感じる。録音現場を見たわけでもない私がどうしてそんなことを感じるのだろうか。まず、今ときコマmercial・ベースでは考えられない1/2インチ、76cm/sec速行のアナログ録音で行なったことでもいえる。東芝EMIという大きな組織のなかで、悪い言い方をすれば古い実験のくり返しといわれても仕方のないような手段をとったこととは、いくらDAMのためとはいえ破天荒のことだと思う。今や時流はデジタル処理で済みますがヨーロッパでも常識という時代なのである。このレコードを手にして受けた宮沢明子の音楽と同時に、その音楽の共同作者の製作スタッフの強烈なまでの音に対する執念を知ったのである。

前にも話をしたSPレコードのコルトーの演奏には、いつも繊細な情緒と鋭い気迫に恐れ入っている。これも旧い容器に最近の技術を加えて得られることだが、最近さらに驚くべき体験もあった。トーマス・エジソンの発明になるブルー・アンペローラーという蓄音機である。これは今世紀初頭に普及した比較的ポピュラーな蓄音機であるが、発当初の蝋管形式の改良を重ねたハードとソフトである。もちろん、録音、再生ともにアコースティックである。意外に大きな音がするのに驚くのだが、さらに演奏会場のホールトーンが聞えて

来る。これは初期の円盤録音には考えられなかったことをエジソンはどうにやっていたのである。残念ながらエジソンのソフトには気の利いた演奏がない。マーチ・バンドやダンス音楽が残されているが、その音のなかに演奏者のエクスペッションがきれいに入っている響きを聞くことが出来る。

エジソンはかつて録音機の原理を手のひらに感じる自分の声の振動と知ってその変化を錫管の上に移した。その動きは手のひらに感じた前後の機械的運動である。一方、エジソンの発明の後を追ったベルリーナは、生産性を考えて管でなく盤にしたのである。現在のレコードの源流である。ところがエジソンの縦振動ではなく、音波のエネルギーを90度方向を変えた横波で処理した。音波の疎密をそのまま縦波で扱うか、横波で記録するかは、現在のような増巾という手段のない時期では方向転換の信号伝達の損失は大きいとみななければならない。それがホルトーンのような細かな音が聞えるか、演奏の気迫が感じられるかの差になって残っているのだと判断した。さらにいかに古いシステムであっても、その音響エネルギーの処理が適切ならば音情報は正確に残るものだと感じたのである。創始者トーマス・エジソンの超アナログ手法は、空間のエネルギーをいかに損失なく他の形に置き換えるかということだった。現代LPレコードも電氣的処理は加わったがこの原理には変りない。前述の1/2インチテープの記録法がつけ加わっても同じである。つまり、その再生ヘッドの出力に極めて能率の高いスピーカーを直接つけたとすると音はちゃんと出て来るのである。アコースティック・システムの変型として成り立つ

とはSP・LP・テープどれでも同じなのである。ということはアナログ・システムは音情報のパワーをふくめた伝送システムなのであることが判る。

一方、最近のデジタル方式は、情報そのものは符号化されているからそのものは自らはパワーを持っていない。ここがアナログとデジタルの大きな違いになっている。デジタル・オーディオが始まって2～3年は過ぎた。当初のハードの不備よっての音質の悪さは解消され、説得力のある歪の少ない音が聴けるようになった。その低音の力強さ、音のゆらぎの無さはアナログ記録では得られないよさである。ところが、音のよくなったデジタル・サウンドであるが、私には音楽がらみで聞くと、演奏家の気迫とか抑揚というダイナミズムに関した要素がアナログよりも下手に聞えるのである。音質のよし悪しを論ずると色調の現表と同じに受け手、聴き手で勝手ないい分が出て来る。しかし、音楽のダイナミズムは、音楽家の姿、かたちであり主張であると思う。初めに宮沢明子の個々の音楽の評価のしかたをしたのも、そうした音の動きの結果であると思うのだ。

DAMオリジナル録音が美しい音で記録できたということは、関係者の執念が突ったといえよう。それ以上に私は、デジタル録音とは一味違った現実感豊かな音楽の抑揚がとらえられていることがなにより成功であり、後世の貴重な記録になっていると信ずるのである。

■本稿は「マニアを追い越せ大作戦」のレコード(DOR-0127~8)に掲載された文章を転用させていただきます。



## 録音に立合って

東芝EMI録音課 池田 彰

### ピアノ録音の発想

ピアニストの意志による指からの打鍵で伝えられた、ハンマーの打弦によって出る、アタックの衝撃音と、それによってもたらされた弦の振動の響によって発音される。その他にピアノの音を構成するものとして、響板とそれ以外の弦を共鳴させることによって豊かなピアノの響となる。更にピアノを鳴らす場所・音場によって附加される響が増加されてピアノ全体の音となる。

録音する場合は、この四つの構成・アタック・弦の振動・響板・音場を頭で分解して、音として組立てなおしてゆくことが確実な録音方法と言える。しかし現実ではそれぞれの部分にマイクロフォンを設置するのではなく、例え一本のマイクロフォンでも、この要点を満足させることができるのである。

ここで大切なことは、ピアノ音楽に対する録音者のイメージが音を決定してしまうことである。一つの良いピアノ録音がピアノ音楽すべてに良いとは限らないことなのである。それはピアニストが変わると音色が変わると同様に、音楽の種類によって変わって良いのである。録音と言う方法を借りた音楽的手段だと理解し、録音の限界をわきまえてピアノの音のイメージを創作せねばならない。

しかしながらピアノの音のイメージを追求するあまりに、ピアニストを忘れてはならない、音楽を表現するのはピアニストであり、ピアニストに

録音のために負担をかけてはいけぬのである。ピアニストの意見を反映させるべきである。つまり、ピアノ録音の音が勝ってしまってはならない。録音された音が最初に主張されてはいけぬ。音楽が素直に伝達されなければならない。

### スタジオとホール録音

ピアノと言う楽器はそもそもスタジオに於いて発展したのではないことを考えれば、録音の立場からも相違点が明らかである。当然ながらホールの録音が正常であり、結果が良いのである。それはピアノの絃と全体の響が不自然でなく融合されているからである。高音絃の伸び、スケール感、奥行き、豊かな低音になっているのである。

スタジオ録音ではピアノの音を創造すると同様な作業をしなければならない。その正確な構築は、完全なモニターシステムを要求する難問があるにもかかわらず、ピアニストの意志の動くままに、好きな時間に制限なく録音できると言う利点がある。スタジオ内は外部雑音がなく、演奏に集中できるが、常に同じ状態の音にするには、エンジニアの多大な協力が必要である。

ホールでの録音が安易であるからと言っても、そのための録音機器の施設とホールの選択、スケジュール等には問題はあつた。自由な時間での録音は日本ではできない。外部雑音・ホールノイズ等でピアニストの集中力を欠くこともある。空調（冷

暖房）を入れたまま録音できる程にノイズを押えてある所はない。本番開始とともに空調を切らなければならない。これによってピアニストに負担がかかることは当然で、それ以上にピアノの音の状態も変化してくることが欠点である。気候的には春と秋が望ましいが、音響的には乾燥した冬が良いのである。

### ピアノ録音の実際

メイン・マイクにはノイマンのM-269のベアマイク、響板・絃の響にAKGのC-451、残響収録にノイマンのSM-69を使用した。

M-269は真空管式の古いマイクロフォンであるが、粒立ちの良い暖かな音色を持った多目的マイクで絃楽器等にも良く使用したりする。それに最大の利点は、パワーサプライ側でマイクの指向性を無段階に無指向から双指向に変えられることであり、これがベアマイクの近接効果による低音の増大、解像力の微調整ができ、音質調整に最大のメリットをあたえているのである。

M-269はほとんど間隔をもたせずに、マイクの指向軸を高音と低音に、平行よりもやや開いた感じでピアノ中央上方に位置させた。マイクの指向性は単一と双指向の中間位に止めてあるが、音を聞きながら調整してゆく。ピアノの音像の大きさもマイクの間隔で調整できるが、この他に調整卓のバンポットを利用して調整できるが、私はこ

の方法をとらない。

C-45Iは明解な音質で絃の響・倍音を収録するのに最適で、指向軸が筒状の上方にあることが、マイクをピアノの絃に近づけることに有利なのである。

C-45Iは単一指向性で間隔を50cm離して、響板に向けて近接させ、低音をカットしてミックスする。この量は音楽内容によって変化させている。又ピアノの音量・ヴォリューム感によっても変化させている。このマイクを上げることによって華やかな音色になるが、和音のフォルティシモでは上げ過ぎることによって濁ってしまうので注意した。

SM-69はMS方式のワンポイント・ステレオ・マイクで、2本以上のマイクをホール内に立てるよりも響の混濁がなく、メイン・マイクとミックスした時に自然の広がりや響が得られるので好んで使用している。

SM-69はピアノとの距離を10m程度にして、ピアノ高音部のフラッターのない位置に置き、その位置はホール状態によってさまざまであるが、傾向として後方に行く程フラッターが多く、その点で問題があればピアノとの距離を縮めてもその部分はさけている。又自由にマイクが置ける良いホールであれば、メイン・マイクとの響と音量の加減を聞いて、曲想に合せてスケール感を調整すれば最良である。

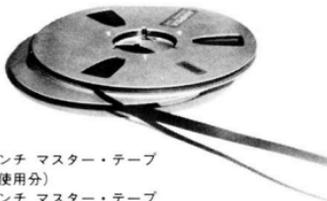
しかしながら、これらのマルチ思考のマイク・

セッティングは、どのようなホールの状態でも良好な結果を生むためのもので、最良の方法ではない。できれば響の良い、混濁のない、良い状態のピアノが設置されている固定の場所・ホールで録音できれば、2本のマイクで充分な録音が可能なのである。かえって素直な混濁のないピアノ音楽が表現できるのではないかと思われる。

重要なもう一点。ピアニスト・調律師・ディレクター・エンジニアの意志が同方向に向くためには、テスト録音のプレイバックの時に確認・修正して、録音についての不安をぬぐいさって演奏に集中できる状態にしなければならない。そのためにモニタールームの音場を把握していなければならない。ホールの場合は楽屋が多く、音響的にほとんど処理されていない、室の響と周波数特性がモニターするに適さないブリーな室が多い。そのために、吸音用カーペットと衝立を使用し、モニター系にイコライザーを入れて一応聞き易い状態にするが、低音の響だけは簡単な方法では処理できないので、エンジニアの頭の中で計算し勘案して、ピアノの音のイメージを造っている。又その時のモニターする音量によって高低のバランスが変化するので、聞きなれた音量で、楽器の自然な音量でモニターする。

## 録音機器とピアノ

ピアノの製造社が変わると音色も変わると同様、そ



1/2インチ マスター・テープ  
(今回使用分)  
1/4インチ マスター・テープ  
(通常)  
の比較写真

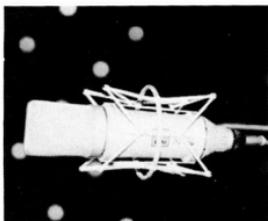
の製造社の特色を出すためにマイク・ポジションも多少変化する。それ以上にマイクの種類によって大きく変化してしまうのである。又それをミックスする調整卓、録音するテープレコーダーによって、その総合で音質が決定されるのであるが、これらも一概に断定できるものではなく、エンジニアとディレクターの嗜好と長い経験により決定してゆくものである。

今回の録音に使用された機器は、現存するものの中で最良と信ずるものを使用した。ノイマンのマイクロフォン、調整卓はスチューダ089、テープレコーダーはアンペックス ATR102のハーフインチである。ハーフインチ2チャンネル76cm/secは、S/Nの点ではデジタルに負けるが、音質に関しては、音色・艶余裕・広がりで優位に立っている。使用したテープはアンペックスの456である。これは38cm/secではヒスの雑音分布が耳につき易い周波数で難はあるが、76cm/secにすることによって倍の周波数になり、456の特長であるダイナミックレンジの広さが生かせるのである。

録音レベルはその機器の性能とテープの限界を知って決定されるが、ピアノは特にゴーストにも留意しなければならない。テープヒスとゴーストと歪の兼合が、その録音レベルを決定する。ノイズリダクションを使用しヒス・ゴーストを軽減する方法もあるが、それ以前にノイズリダクションを使用することに於いての音質劣化・変化が大きいのでピアノには特に使用しない。

### 録音の目的

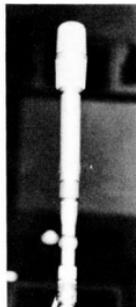
私達が何故このように些細なことに留意して、それを重大なことを伝えることと言わなければならないのか、それは音楽と言う大前提があるからで、音楽を伝える手段として最良の方法としての録音を目指しているからである。音楽を生演奏で楽しめれば良いが、色々な条件が附加され、その演奏そのものが悪い場合もある。レコードは完全であると言う発想から、良い演奏を伝えたいと望むのである。音楽の音の中に含まれている微細なニュアンスも伝えたいと思うのである。



M-269

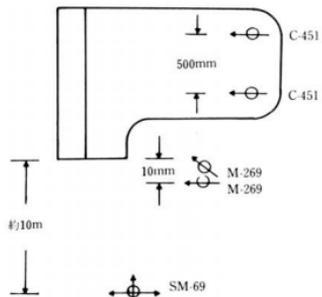


C-451

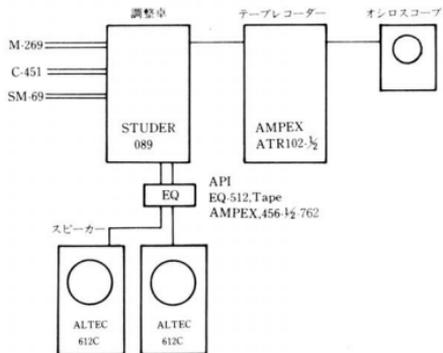


S M-69

## マイク・セッティング



## 録音ダイヤグラム



## ■スタッフ

---

---

プロデューサー	鈴木武昭
プロデューサー／ディレクター	伊藤玲子
バランス・エンジニア	池田 彰
ピアノ・チューナー	鶴田昭弘
メカニック・エンジニア	金子秀作
ジャケット	東芝EMI(株)デザイン室
カメラ	GUY CROEGAERT (ギイ・クルガル)
制作協力	松尾楽器商会 神原音楽事務所
録音協力	サウンド・クリエイター
録音場所	茅ヶ崎市民文化会館大ホール S.59. 3. 14
使用ピアノ	スタインウェイ フルコンサート
企画・制作	第一家庭電器DAM
製造	東芝EMI株式会社

---

---

表紙：C. モネ画「ひなげし」（1873年）

**コ**ンパクト・ディスクは、現代の最先端を行くデジタル技術レコードの世界に生かした画期的な性能を持つ新しいオーディオ・システムです。音質は非常に忠実度高く、雑音は殆どなく、澄んだ迫力のある音を楽しむ事ができます。それは記録再生の方式が従来のアナログ方式とは全く異なっているからです。

**従**来のレコードは音の振動そのままを直接溝に刻み込んでいました。しかしC.D.では音楽信号を微細に分解し、それをコンピューター等で使う符号に置きかえて記録します。音は空気振動の波ですが、それをマイク等で電気信号の波にかえます。その波を一秒間に44,100に分解し、そのひとつひとつの大きさを約65,000の段階で表わします。この様にすると音楽信号はすべて数字で言い表わせる事になります。その数字を0から1だけの2進法に置きかえて、ディスク表面に信号のあるなしを表わすパルス符号として記録します。これがPCM方式です。この様に細かく分解しますと、人間の耳では全く分解した事は感知できません。美しいカラー写真を顕微鏡で見ますと、細かい点からなり立っているのと同じです。再生には針を使わずに細いレーザー光線をあてて符号を読みとり、再び元の波形を組み立てる訳です。従って再生時はディスクの表面に全く非接触なので、その寿命は半永久的とも言えます。この様にデジタル方式ですと実際に記録されるのはあるかないかの符号だけですので、たとえ記録符号が歪んだりしてもあるなしだけ判別できれば、全く影響な

く完全な元の音が組み立てられます。つまり記録再生時の音に対する影響が大変に少なく、マスター・テープそのままの音が忠実に再生されます。

**一**のC.D.はプロ用デジタル録音システムとほぼ同等の素晴らしい規格を持っています。記録信号は16ビットで、音の大小の幅を表わすダイナミック・レンジは90dB以上と従来より大幅に広がりました。ホールで生きたオーケストラは約100dB程といえますから、ほぼ生に近い迫力を再生できる事になります。もちろんピチパチと言った針による雑音は全くありませんし、SN比は従来より著しく向上、雑音は殆どきこえません。音のユレを生じるワウ・フラッター(回転ム等)は測定できない程少なくなりました。左右の音が混じりあってしまうクロス・トークは全くと言っていい程ありません。そして音を汚す歪も従来より一桁少ない0.05%以下となり大変に澄んだ美しい音が再生できる様になりました。

**一**のディスクの信号面は保護膜におおわれており直接外から触れる事はできませんが、レーベルの反対側の光った面からレーザー光線を当てて、符号を読みとりますので、その面に汚れや傷をなるべくつけない様ご注意ください。もし汚れがついてしまった場合は柔らかい布で軽く拭きとって下さい。油等しつこい汚れの場合はエチルアルコールで拭きますときれいにとれます。表面が濡れている場合は乾いた布で拭いて下さい。従来のLP用スプレーやクリーナーはご使用にならないで下さい。

# LA PRIÈRE D'UNE VIERGE

Les Œuvres Populaires Pour Piano  
Par MEIKO MIYAZAWA



1. エリーゼのために
2. 夜想曲 作品9の2 「愛情物語」
3. 入江のざわめき
4. マラゲーニヤ
5. 楽興の時 第3番
6. 乙女の祈り
7. トルコ行進曲
8. ワルツ 嬰ハ短調
9. トロイメライ
10. 愛の夢
11. 小犬のワルツ
12. 月の光



11  
2  
あ  
の  
光



DAW  
MADE IN JAPAN  
¥3,800